全国中学生人権作文コンテスト
熊本県大会　特別賞受賞

水俣病学習を通して

水俣第一中学校二年
中尾ももか

皆さんは、「水俣」と聞いてどういうイメージを持っていますか。「水俣病」イコール「公害の町」というイメージが強いのではないでしょうか。私は、小さい時からずっと住んでいる水俣。春になると湯の児海岸に面して桜の花が満開に咲き、一面に広がる青い海に囲まれた、自然豊かで私にとって自慢できるふるさとです。本当にこの水俣で公害が発生したのだろうかと海をながめながら時々、考えてしまいます。

水俣の学校は、小学校から総合学習の時間に水俣病について学習をしています。水俣病は、工場の排水中のメチル水銀に汚染された魚や貝を沢山食べることによって起きた水銀中毒です。空気や食べ物を通じてうつる伝染病ではなく、遺伝することもありません。体内に入ったメチル水銀は主に脳など神経系をおかし、手足のしびれ、ふるえ、言葉がはっきりしない、動きがぎこちなくなるなどの様々な症状があります。実際に、水俣病患者さんとの交流があり、当時の話を聞くことができました。私にとって想像もできないほどつらい経験をしてこられていることを知り、衝撃的な思いでいっぱいでした。言葉の暴力による差別をうけてきたこと、水俣というだけで偏見の目で見られること、多くの人が亡くなり、今も水俣病による症状で苦しんでいる人が大勢いらっしゃるということに心が痛みます。最近でも水俣病はうつると思っている人がいたことを新聞で読み、とても切ない思いになりました。

小学校の授業で、「水俣病の名前を変えるべきか、変えないべきか」について討論会をしたことがあります。私は、水俣病という名前を変えるべきに賛成しました。なぜかというと、水俣の町が悪く言われているような気持ちになったからです。私は、反対意見の友達の言葉を聞いて、私自身が水俣病とちゃんと向きあっていないことに気付かされました。「水俣病という名前を変えたいと考えることは、水俣病から逃げていることと同じだ。水俣病という名前だからこそ、水俣について深く知ってもらえるのではないか」と言われたことに、深く考えさせられました。一度ついた悪いイメージは、なかなか消滅することは難しいことだと思います。また、悲しい過去を変えることもできません。私達にできることは、過去と向きあって、水俣病について人々に語り伝えていくことが、少しでも差別や偏見をなくすことにつながるのではないかと思います。

私のいとこは熊本市内の学校ですが、水俣病について水俣病資料館に行って学習したそうです。決して私が水俣に住んでいるからと、からかうこともありません。他の学校でもきちんと学習がなされており、正しい知識や情報が伝わっていることをうれしく思います。

過去に公害という大きな被害を受けた水俣は、マイナスイメージが強くあります。しかし、水俣では、市民全員が環境問題に一生懸命取り組んでいます。ごみの分別、リサイクル活動を積極的に行い、中学校でもゴミュニケーションの時間を設け地区ごとに分別活動に参加しています。自然環境の破壊から環境問題を真剣に考えて取り組んでいることが、水俣の再生となりプラスイメージに変化しているように思います。

私が通っている中学校は、環境のモデル事業で学校エコ改修工事をしました。環境に優しく、夏は涼しく冬は暖かく過ごせる工夫がされています。そして、太陽の光が入りやすく、明るい学校に校舎が生まれ変わりました。学習しやすい環境の中で、友達と一緒に楽しく学校生活を送れることがとても幸せなことだと感じています。

今の水俣が明るく過ごしやすい町に変化しているのは、環境に対して皆の意識が変わり、深い傷を負いながらも、水俣病と向き合ってきたからだと思います。「環境モデル都市」イコール「水俣」だと自信を持って私は伝えることができます。

最近、テレビや新聞などで水俣病問題をよく耳にします。水俣病で今も苦しんでいる方々が沢山いらっしゃることも現実です。水俣病患者の補償問題は、簡単に解決できることではないと思います。犠牲になった方々のことをこれからも忘れることなく、真剣に考えていくことが大切なことだと思います。

過去にあった悲しい出来事を二度と繰り返さないように、これからも真実を伝えながら語り継いでいきたいと思います。私のふるさとは、自然に囲まれたいいところだと言えるように強い意志を持って行動できる人になりたいです。